

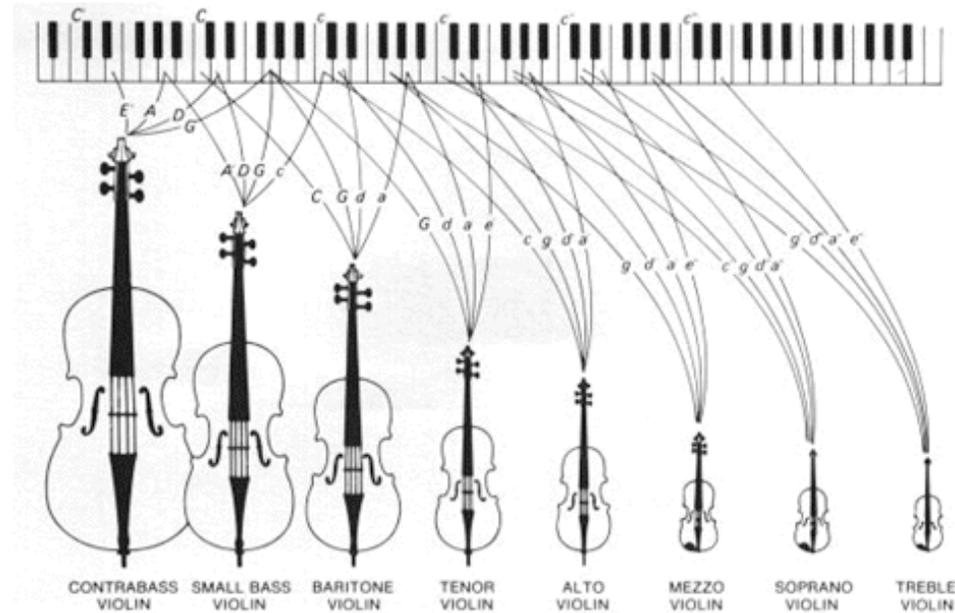
研究概要報告書【音楽振興部門】

( 1 / 3 )

研究題目	ピッコロ・ヴァイオリンの音響特性の分析および国内普及に関する研究	報告書作成者	松原 正樹
研究従事者	松原 正樹, 川島 佳子		
研究目的	<p>本研究はアメリカNew Violin Associationのカーリン・ハッチンス博士が設計, 製作を行ったハッチンス・オクテットのうち一番高音域を担当するピッコロ・ヴァイオリンに関する研究である。</p> <p>発足は 1960 年代と比較的最近であるため, 認知度が低くその音響特性が分かっていないのが現状である。演奏家, 楽器製作者, 研究者, 音楽教師, 作曲家, 音響学者といったそれぞれの専門家が協力して初めて楽器に光があてられ, ピッコロ・ヴァイオリンに関する音楽の振興が可能となる。</p> <p>これまで我々は世界で唯一の現役ピッコロ・ヴァイオリン奏者兼指導者であるロシア人のグレゴリー・セドフの協力のもと, ピッコロ・ヴァイオリンの演奏普及活動を行ってきた。同時に日本人楽器製作者の菅沼氏によって4丁のピッコロ・ヴァイオリンを製作した。本研究では, 日本人の演奏家育成を目的とし, そのためのマスタークラスおよび発表の場を企画することを目的とする。</p> <p>近年までは日本に楽器もなければ演奏家もない状況であったが, 徐々に状況は変化している。本研究を通じて, この楽器の音響特性が解明され, 演奏するパイオニアが日本に出現することで, 更に普及・研究が加速され, この楽器の為の作曲をする作曲家の出現, 音大での講座開設など, 更に音楽界に新風を吹かせることができるものと期待する。</p>		

研究内容

ピッコロ・ヴァイオリンとはアメリカの音響学者・弦楽器製作者のカーリン・ハッチンス博士が 1960 年代に提唱した 8 つの弦楽器(右図)ヴァイオリンオクテットの中で一番高音域を担う最小の楽器のことである。ヴァイオリンの1オクターブ高い音域を演奏可能にするため、NAS A がベル研究所に依頼して開発されたロケットに使用する細さ0.178mm, 張力 530,000psi の特殊なワイヤーをE線に用いている。ピッコロ・ヴァイオリンは形状や弦の張り具合も異なる事からその奏法はヴァイオリンとは似て非なるもので早期の音響特性の解明と奏法の体系化が求められている。しかし、設計の段階において数学的な計算に基づく提唱がなされて



いるものの、実際の演奏音の音響特性(インパルス特性, モード特性等)の分析はまだなされておらず解析が望まれる楽器である。そこで本研究では音響分析が可能な環境の構築を目指して、国内においてピッコロ・ヴァイオリンの認知度を高め、楽器製作者と演奏家を発掘することを目的とする。具体的にはピッコロ・ヴァイオリンのマスタークラスを開催し演奏家の育成を行う。そしてその成果発表会を企画し、楽器のすばらしさを広く知ってもらう。

2013年のツアーとして、ロシア人のピッコロ・ヴァイオリン奏者グレゴリー・セドフ氏と共に、その1期生の学生、セミオン・ザッハーリャエブもロシアより招聘し、オーケストラとの共演で、次世代デビューコンサートを企画した。同時に、日本でも演奏家養成プロジェクトを行い、2人のヴァイオリニストが参加した。またクラドニ法による楽器音響の分析を試した。

研究概要報告書【音楽振興部門】

( 3 / 3 )

<p>研究のポイント</p>	<p>本プロジェクトは2007年より継続して研究や演奏会を行い、2011年に国内初の楽器製作に成功、本研究である2013年度は国内初の演奏家デビューに成功したこと。共同研究者のピッコロ・ヴァイオリン研究会代表川島佳子氏に加えて、東京芸術大学教授澤和樹氏、弦楽器製作者菅沼利夫氏、東京都交響楽団第一ヴァイオリニスト、中根みどり氏等、ピッコロ・ヴァイオリン奏者グレゴリー・セドフ氏など国内外の協力者によって草の根的な活動を行っていること。</p>
<p>研究結果</p>	<p>日本での2名の演奏家の育成に成功し、セドフ氏の来日を待たずとも、演奏会を開催し、新しい聴衆を獲得する為に活動ができるようになったこと。また、セドフ氏とは違った個性のある演奏家により、ピッコロ・ヴァイオリンの楽器の新たな可能性やレパートリーの幅も広がったこと。その成果として、日本人ピッコロ・ヴァイオリン奏者古館由佳子氏が2014年7月に開催されたWorld Performing Arts Contestに日本代表で出場し、見事5つの部門で金メダルを獲得したこと(うち一つがピッコロ・ヴァイオリンによる演奏)日本語で対応できることで、ラジオや新聞などメディアの露出の機会も増え、結果として楽器の認知が促進された(NHKラジオ、TBSラジオ、朝日新聞)。</p> <p>本研究の演奏会実績はオリンピックセンターでの成果発表会、カワイ パウゼでの講演+演奏会、カワイ パウゼでのリサイタル、浜松市楽器博物館での演奏会を日本人奏者によって行うことができた。またオリンピックセンターでの楽器体験ワークショップ、シンポジウムの他、カワイ・サウンド技術音楽財団の講演会や音楽芸術マネジメント学会での講演発表なども行った</p> <p>その他の成果に関してはピッコロ・ヴァイオリン研究会のWeb ページへ(<a href="http://piccoloviolin.cocolog-nifty.com">http://piccoloviolin.cocolog-nifty.com</a>)</p>
<p>今後の課題</p>	<p>これまでのマスタークラスや演奏会を引き続き行いつつ、情報交換の場としてピッコロ・ヴァイオリンシンポジウムの定期開催を計画中である。永井洋平先生の講演や、レノニード・グルチン氏(群馬交響楽団チェリスト、元サンクトペテルブルグ ハッチンス オクテット メンバー)などをゲストにした、交流会や演奏家、楽器試奏会などを通じて議論を深めていく。また、次なる課題は作曲家によるピッコロ・ヴァイオリン用の楽曲の製作、音響学者による楽器音響特性の詳細な分析を予定している。</p>



(注:写真, データ, グラフ等 研究内容の補足説明にご使用下さい。)